

## 【伝わりやすい声かけ】(運動会バージョン)

運動会の練習は、自閉症のお子さんにとっては、学校生活では変化の日々になり、たいへんな季節です。

いつもの時間割とは違い、いろんな場所で、たくさんの先生から指導されることもあり、その言葉を聞いて理解し、動くのは、普段より難しいものです。

けれども、お子さんにとっては、やってみたい、上手にできたらいいという楽しみな行事。親であれ先生であれ、少しでも、競技に参加して欲しい、楽しんで欲しい…それは、同じ気持です。

そこで、お子さんに、競技の内容や、今する活動など、より理解してもらえるように、大人側の声かけを工夫することが必要になります。お子さんに、練習や本番で、少しでもわかる、できる環境の中で、過ごして頂くために、ぜひ、以下のようなポイントを意識していただければと思います。

また、自閉症のお子さんに伝わる声かけのポイントは、普通学級に通われている他の生徒さんにも、よりわかりやすく伝わる「優しい言葉」です。

ただ、声かけよりも、見えるコムにすることを忘れないでください。

### I 自閉症の障害特性からの 声かけのポイント ー視覚的、具体的、肯定的な声かけー

#### 1. 視覚的に声かけしましょう。【視覚優位】

- 子どもが見て判断できるように、声かけする。

例：「この枠の中に立ちましょう」「〇〇ちゃんの椅子に座ってね」  
「白いラインの上を走ります」「赤いコーンにタッチします」

#### 2. 具体的に声かけしましょう。【抽象的な言葉がわかりにくい】

- それだけでは映像化出来ない言葉は、単独で使わないようにする。  
「これ」「あれ」「それ」といった指示代名詞

変更例:「旗は…」「コーンに…」「応援グッズを…」  
「〇〇さん(くん)へ…」

「しっかり」「きちんと」「ちゃんと」「ゆっくり」「さっさと」「よく」  
などの副詞

変更例:「手をふります」「歩きます」「見て」など、具体的な  
行動だけを短く伝える

「優しく」「きれいに」「正しく」「ひどい」「まじめに」「無駄だ」  
「急に」「自由に」「丁寧に」などのたくさんに意味のとれる  
形容詞、形容動詞

変更例:「新幹線のように走る」(はやさのイメージがしやすいもの)  
「人差し指が空をさすように」  
(具体的な形が、結果そうなるようなもの)

●何をするか具体的な事柄を伝える。

例:「きれいにしてね」→「水を拭いてください」  
「ちゃんと片付けます」→「ボンボンは箱に入れてね」  
「優しくおいてね」→「音なしでおきます」

### 3, 肯定的に声かけしましょう。【求められていることがわかりにくい】

●否定的な声かけだけで、終わらないようにする。

例:「登りません」 →「下りましょう」  
「しゃべらない」 →「お口はチャックですよ」  
「砂はさわらない」→「手は、ひざにのせて」

1, 2, 3を合わせて表現すると、子どもにとって一番わかりやすい表現になります。また、視覚的、具体的、肯定的な言い方をすることで、「できる」と「褒める」ことが主体になります。

逆に、聴覚的、抽象的、否定的な言い方では、「できない」と「叱る」が主体となり、お子さんの意欲を損なう結果にもなります。

## II その他のヒント

### ●こちらに注目できる(耳で)時に声をかける。

#### 注目している時に、声かけをする。

ひとつの活動が終わったら、矢継ぎ早に言わない。落ち着くのを待つ。その後、注目してもらうように、興味のあることで、まず、働きかける。本人の動きに合わせる。

### ●同じような抑揚や言い方をまねて表現する。

子どもの発語の要素は本人にとっても聞き取りやすい可能性がある。子どもにとって理解しやすいコミュニケーションのストライクゾーンを利用する。

### ●「○○なさい」と「○○しない」は一字違いで大違い！の内容になるので、子どもによっては、聞き取りにくいかも…。

例：「列に並びなさい」→「列に並びましょう」

「着替えなさい」→「着替えましょう」「着替えてね」

### ●抽象的な言葉やわかりにくい言葉を使うときは、子どもに具体的な行動が表れているときに表現する。

例：ぐったりしているときに→「疲れたね」

正しく座っているときに→「きちんと座れているね」

上手くできた時に→「きっちりできたね」

### ●誉めるときは大げさに！また、途中には、励ましの言葉を添える。

・誉めるとき…子どもの行動に値打ちがあることを教えるため

例：「やったー」「すごい！できたねー」「終わったね」「上手！」

「ありがとう」

・励ますとき…子どもの行動を維持させるため

例：「頑張ってるね」「いいゾ！その調子」「なかなかうまい」

「もう少しだね」「サスガだ」

### ●次にして欲しいことのみ、端的に伝える。

#### たくさんを一度に言わない。

例：「手を洗って、カバンをおいたら、着替えてからシューズを持って、

体育館に行きましょう」→「手を洗いましょう」終わってから「カバンを片付けます」済んだら「着替えましょう」その後「シューズを持って」出してきたら「体育館に行きますよ」

例:「バトンをもらったら、走って、ゴールまでいくのよ。」→「バトンを持って」もらったら、「スピードUPで走る」ゴール前まで来たら「コーンにタッチよ」

(それを、図示やスケジュールしておき、前もって見せる、渡しておく、よく伝わる。声で動かすと、指示待ちになるので、要注意！)

### ●子どもに伝わりやすい声のトーンをみつける。

高すぎる、抑揚のきつい声かけは、かえって恐怖感を与える。また、怒ったようなドスの利いた低い声も、怒られているかのような勘違いを生む。大きすぎると威圧感を与える。小さすぎると聞こえない。

### ●聴覚からの刺激は、しんどい時がある。また、なかなか動けないという場合は、声かけを絵や写真、文字表示に変える。

(声かけでわかるようなことでも、見せて伝える方が、むしろ安心感を与える)

### ●前もって、わかっている時は、その順番を伝えておく。

また、変更や、練習の回数などは、あらかじめ伝えて、約束を守ること、子どもに安心して、最後まで取り組んでもらえる。

### ●難しい、また、しんどい時こそ、本人の選択ができるように工夫する

休む場所、する回数、順番、使う道具、続けるか休むかなど、全体の活動の中でも、できるだけ、本人の気持ちを尊重できる場面を増やす。子どもが認められている環境だとわかることで、自分でやろうという意欲に繋がる。

以上のことを、おしゃべりではなく、見えるコムでされるとなおよいでしょう